
モラトリアム ～未熟な感情の中学生達～

イシュキック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モラトリウム ～未熟な感情の中学生達～

【Nコード】

N5226D

【作者名】

イシュキック

【あらすじ】

ごくごく普通の学校生活を送っている佐野叶汰は中学3年生。小学3年の頃に記憶を失って以来は、自分なりに満足した中学生生活を送っている。そんな彼らの普通であり、楽しくて、たまに不思議なことが起こる青春を描いたストーリー。

プロローグ（前書き）

本当に普通の学校生活を書いてるかと思えば、実際にはありえないようなことを書いていたりもしています。

そのようなことを不快に思う方は、見ないほうがいいかもです・・・。

各キャラの境遇やプロフィールなんかは、作中で紹介されていきます。隅々まで読んで、それを理解して、より楽しく想像していただければ幸いです。

「え〜つと？」

俺は一人。ここは、京都。んでもって今は5月。俺の名前は佐野^{さの}叶汰^{きょうた}。つい先刻まで、何人かの友達と一緒に騒いでたはず。ところが、今は一人。簡単に言ってしまうえば、学年全体で修学旅行に来たのだが・・・置いて行かれた。

まわりの通行人達 「ザワザワ・・・」

俺はさみしがり屋でも何でもないが、やはりこんなにたくさんの人の中に一人でいるのは悲しくなってくる。

そうだ、元はと言えばあの馬鹿教師の数え間違いが原因だろう！

まあ、そのベンチにでも座りながら一応昨日の夜から今までの経緯を思い出してみよう。

5月「ミサンガと記憶」 1・回想（前書き）

この回は、主人公（一応）の友達を紹介となっています。

5月「ミサンガと記憶」 1・回想

ここは某ホテルの一室だ。昨日の夜、俺達はクラスで仲の良い？男子3人女子3人でトランプをしていた。ちなみに、最初の種目はポーカーだった。理由は

「そりゃあ・・・ほら、大人数でトランプやるって言ったらポーカーじゃない？ねえ？」

と、クラスの女子の中でもリーダー的存在であり、クラスの委員長でもあり、また俺達男子3人の共通の友人である「水屋 晴^{はる}」が、誰に問いかけるわけでもなく発言したからである。この水屋だが、なかなか美人である。身長は160ジャスト。体重は聞いたことが無いが、なかなかいい体つきでもある。しかし、少々性格に難ありで、人の秘密を探ったり、どんな男子とでも必要以上に喋るので、俺は少し苦手だ・・・良く言えばだれとでも仲良く接することができるってことなんだが。まあ、そんな感じのやつだ。

「んじゃ、やろーよ！」

と、エブリヴァデイが意見を言う前にちゃっちゃと配り始めたこの女子が、「神下 真琴^{まこと}」だ。身長は161ぐらいだろう。そしてスマート。ちなみに、今部屋の中にいる女子の中で俺が一番信用できる女子だ。理由は、中性的な外見のため、女子とアツチ系の話をすることが少ないから。もちろんそれだけじゃなくて、その明るい性格と親切さも理由の一つだ。向こう見ずな所もあるが・・・本人によれば、女子からラブレターをもらったことも何度かあるとか無いとか。うらやましーぜ！。さて、配り始めて数秒後・・・

真琴 「あれ！？今何枚ずつ配ったんだっけ？」

「4枚」

「5枚」

と口をそろえて違う答えを言ったのが、「新田 未来矢^{みくや}&末早矢^{みはや}」の双子姉弟である。身長は2人とも155程度だろう。体系は普通。

未来矢が弟、未早矢が姉。この双子、驚くことに一卵性双生児で顔が一緒である。たまに入れ替わってイタズラをするのはデフォだ。クラスの女子の話では二人ともカワイイ系らしい。まあ、俺達男子3人の中では未来矢が1番モテてるからな。納得。未来矢は天然が入ってると思う。未早矢は腹黒・・・って程ではないが、毎回のいたずらの首謀者だ。普段は未早矢が髪の左側をピンでとめたりしてるのですぐ分かったりする。いや、それを未来矢がやると俺は騙されるんだが・・・

「どっちだよおまえら！ってかポーカーって何だよっ！」

と、大声を張り上げたのが野球部のファーストの「村野 豪」だ。

この中で1番頭が悪い・・・と言っちゃなんだが、賢くない？力は強くて、右手でリングジョイスを作れる程度らしい。（どうでもいいが）身長は178、体重は75。俺より10cmも高い。ってかおまえポーカー知らないのかよ！

未早矢 「教えてあげようか？豪くうん。ポーカーと言うのは、ハートの3が手元に回ってきたら『ポーカー！！』って大声を裏声で張り上げるゲームなんだよ？わかった？」

豪 「んなわけねーだろ！」

そりやいくら豪でも信じるわけねーわな？真琴も笑いをこらえてるし。

みんながカードをとった。え〜っと・・・あ、いきなりクローバーが揃ってやがんの。ラッキー

豪 「ポーーーーッ！カーカーア・・・ゲホッ！ムッ！」

なんという強運・・・ハートの3がまわってきてたか。ってか裏声出せてねーし。

豪 「こ、これでおれの勝ちか？」

晴 「私3枚チェンジ！」

俺 「俺チェンジなしで。」

真琴 「私もしないでいいやー」

真琴のやつ顔に出てるぞ、ニヤニヤしちゃって・・・ホント分か

り易いやつだなあ。

未早矢 「2枚チェンジでー」

未来矢 「左に同じ。」

未来矢の左隣は未早矢だ。

豪 「あれ？チェンジってなに？・・・ねえ・・・ちょっと叶汰さあん？シカトしないでよ。」

あ、俺の左隣は豪だったか。鬱陶しいからしっかりと説明してやるか・

・

俺 「至極簡単に説明すれば、同じ数字を揃えたりペアを2つ作ったりする。んで、チェンジは1回ね」

うん。俺にしてはまともな説明。

晴 「佐野はKY王佐野の称号をGETした。」

ははははは！ごめんなさい・・・

5月「ミサンガと記憶」 1・回想 その2

豪 「じゃあ、俺は4枚チェンジだ」

未早矢 「どーせその1枚はハートの3だろう??」

豪 「むっ!？」

単純なやつ・・・

さて、みんながチェンジし終わったところで、ショウダウン!

俺 「俺、フラッシュね」

真琴 「じゃ〜ん!へへ〜 フルハウス!」

未早矢 「な〜んだ、真琴チンもか〜・・・私も〜!」

流石は未早矢。何だかんだ言って負けないな。

未来矢 「スリーカード・・・負けたかな？」

晴 「フラッシュユ!」

俺 「今んとこ未来矢がドンケだな。さて？」

みんなの目が一斉に豪に行く。

豪 「フルハウスとかストレートとかなんだよコノヤロー!どーせ

ペアなんて何もねーよっ!」

ま、こんなもんだろ。

・・・

ちよつと待て?全部ハートだぞ・・・それに〜・・・3・4・5・6・7。ああ、冗談だろ?

俺 「す、ストレートフラッシュ・・・豪が1番・・・だぞ？」

真琴&未早矢 「え〜〜〜〜〜!!!!!!?」

未来矢 「マジ?良かったね豪!ハートの3があつて」

豪 「お!、なんだ?ハートの3持ってたらやっぱ勝ちか？」

ダメダコイツ・・・

真琴 「アハハ!それ関係ないってば!」

つてなわけで、ポーカ―は1回きりで終わった。次はまたもや晴の提案により、大富豪をすることのなった。

そして、その5ゲーム目に未早矢が

未早矢 「ねえ？このゲームで1番の人がドンケの人に罰ゲームを執行しよう？」

恐ろしい・・・未早矢が勝ったら何をやらされることやら。

結局罰ゲームありでやることになり・・・まず勝ったのは真琴だった。

俺 「まともな人で良かった。」

豪 「まともじゃないって俺のことかよ！」

なぜおまえがキレルんだ！！。もちろん未早矢には蹴りをいれられた。首痛っ！

真琴 「罰ゲームは~~~~・・・ベランダから『死んでしまいたいぐらい恥ずかしい言葉を叫ぶ』ってのはどうだい？」

晴 「え！？真琴にしては過激だねえ？」

真琴 「そうかな？でも、こんぐらいやんなきゃ燃えないでしょっ！」

なるほど。そりやおもしれえ。そしてこつから2位くドンケを決める戦いが行われた。そして、最後に残ったのは豪と晴！流れるにえば豪！だが、豪には切り札があった。

豪 「革命！！！！」

んな！？賢さ5割増しか！？ああ・・・豪のカード3が2枚だよ。しかもひとつはハートだし。

晴 「うつそ〜ん！？」

晴のカードは2とエースしかない・・・決まったな！

晴 「私〜？ってか豪に策略負けした時点で恥ずかしくて死にそう・・・」

真琴 「さあ、晴！どかーんと叫んじゃって！」

晴がベランダに出た。ちなみにここは3階。正直俺は、晴がどんな『死んでしまいたいほど恥ずかしい言葉』を言うかワクワクしてた。ってかみんなしてるだろうけど。

豪 「早く言えよ〜！晴う〜！」

豪は超上機嫌だ。勝ったのがよっぽど嬉しいらしい。

そして・・・

晴 「スウウウ・・・」

「キヤアアアア！豪にお尻触られたあああ！！！！」

おお・・・エコーが聞こえてくる程でかい声だ。

未早矢 「うっわあゝ！！！！超恥ずかしいじゃん！？やつばー！
ー！！！」

未来矢 「あはっ！豪ドン引き」

豪 「ちよつと待てよおっ！これじゃ俺が恥ずかしいだけじゃねーか！」

真琴 「じゃあ、豪が「ウオオオオオ！晴にケツ触られたアアア！」
って叫べば？クスッ」

一同 「アハハハハハ！！！」

しかし、晴が大きな声で叫びすぎたらしく、下の階や隣のベランダ
まで開きだした。ついには、下の階からティーチャーの怒鳴り声と
思われる声まで聞こえてきた。

晴 「っちゃー・・・マズ・・・」

俺 「電気消して布団の中に隠れようぜ！！！」

一同 「りょーかい！」

ガサゴソ・・・

布団にかくれながら思ったが、男女一緒に部屋にいる時点で規則違
反なんだよね。まだ中学3年だし。
こりゃ見つかったらヤバいぞ。

5月「ミサンガと記憶」 1・回想 その3

5分後。

コンコン

・・・

ノックの音がした。ついに来たか。皆、息を殺す。

コンコンコン！

鍵はかけてないから、そろそろ入ってくるだろう。

コンココ・コンココ・コココココンコ

真琴 「プッ」

未早矢 「しーっ」

吹いた真琴に小声で注意する未早矢。だが、こんな訳のわからんことをするティーチャーが、もう誰だか俺にはわかった。

ガチャ

??? 「やあゝまのほとりのいいのおおRRR みどりにしげえる
うつろう」

そうだ。今校歌を唄いながら入ってきたこの人こそ、俺たちの担任
の「坂木 幹彦（みきひこ）（27）」だ。・・・やった。マジラッキーだ。幹
彦Tなら俺達が指導されることも無かるう。ってか校歌を歌つて
とか大分酔ってやがんな。

一同「・・・良かった・・・」

みんなで勢いよく布団をはいで、電気をつけた。

幹彦「おまいら！こんな夜中で大声で叫ぶとは・・・先生嬉しいぞ」

だめだ、狂ってやんの。

未早矢「ハイハイ！センセ！おつまみあげるからとつと帰ってください！」

と言いつつ、豪の鞆からイカの燻製をとりだした。

幹彦「おおおお！流石は新田だ！わかってるじゃないか」

豪「先生！それ俺のです！！！」

幹彦「じゃあなおまえらっ！よいお年をwww」

豪「だから先生！それお」

ボタン！！

つまみがほしかっただけ！？

未早矢「ハハハッ！今は5月なのにね」

晴「酔っ払いすぎでしょ」

豪「ああ、俺が野球の次に大切にしていたものが・・・」

俺「豪・・・わけわからんけど元気出せよ。」

未早矢「続きやろ！・・・といきたいところだけど、今度別の先生が来たら本当にヤバいね。」晴「どうしょつか？」

そんなこんなで、また布団の中にもぐりこみ電気を消して、今度はみんなで語ることにした。

5月「ミサンガと記憶」 1・回想 その4

・・・

晴 「痛っ！真琴、髪の毛踏んでる。」

真琴 「あっ！ゴメン晴！」

晴はロングヘアーだから大変そうだ。ってかさつきから右側で柑橘系のイイ匂いがすると思ったら右隣が真琴だったのか。癒される・・・左隣は？何故か温泉の硫黄のにおいのする豪！おい！この温泉は硫黄は含まれてたっけ？まさか・・・

そんなことを考えている間に、語り。つまりおしゃべり大会が始まった。

どんなことを語ったかと言うと、小学1年生の終わりに、未来矢と未早矢が俺の家の隣に引っ越してきたことを未早矢まず言った。そして、俺が小学3年のはじめに事故にあって、記憶喪失になったことを未来矢が話した。ちなみに俺は今でも小学3年以前の記憶がない。その話で場がしんみりしてきた。しかし、豪が俺に小学4年のころ野球で負けて、そのあと俺にむかって「弟子にしてください！」と言った。みたいな話を豪がしたら、また場が盛り上がってきた。

つまり、俺達の小学校時代の話を語ってただけなのだが、中学校から知り合った真琴と晴には興味深い話もあったらしく、熱心に聞いていた。そして、夜中の1時すぎになった。

真琴 「zzzz・・・」

俺 「おい、真琴寝てるぞ？」

未早矢 「いたずらしちゃえ」

そういう未早矢ももう眠そうなのだが。まあ、とりあえずどつちにしろ真琴を起こさなきゃいけないので、真琴の鼻をつまんでみた。

真琴 「zzzz・・・zzzz・・・zzzz・・・プハッ・・・」

ハア・・・zzz・・・」

俺「駄目だ、起きまへん。」

未来矢「口もふさいでみたら？クスッ」

つまり俺に殺せと？

晴「しかたないね、真琴も寝ちゃったしそろそろお開きにしようか！」

俺「そうだな。」

ってなことで、晴が真琴を起こし、寝ぼけながらも女子3人は自分の部屋に戻って行った。さて、男子3人になったさみしい部屋で、豪だけがシーンとしている。

未来矢が豪の鼻をつまんでみた。

豪「ゝなゝにすんだお」

・・・起きてた。まあ、2人はほっといっておこう。んじゃ

俺「おやすみー。」

5月「ミサンガと記憶」 1・回想 その5（前書き）

1・（1部）最終話です。長いです。

5月「ミサンガと記憶」 1 回想 その5

•

•

•

「痛っ！真琴、髪の毛踏んでる。」

真琴 「あっ！ゴメン晴！」

晴はロングヘアだから大変そうだ。ってかさつきから右側で柑橘系のイイ匂いがすると思つたら右隣が真琴だったのか。癒される・・・左隣は？何故か温泉の硫黄のにおいのする豪！おい！この温泉は硫黄は含まれてたっけ？そんなことを考えている間に、語り。つまりおしゃべり大会が始まった。

どんなことを語ったかと言うと、小学1年生の終わりに、未来矢と未早矢が俺の家の隣に引っ越してきたことを未早矢まず言った。そして、俺が小学3年のはじめに事故にあつて、記憶喪失になつたことを未来矢が話した。ちなみに俺は今でも小学3年以前の記憶がない。その話で場がしんみりしてきた。しかし、豪が俺に小学4年のころ野球で負けて、そのあと俺にむかつて「弟子にしてください!」と言つた。みたいな話をしたら、また場が盛り上がってきた。

つまり、俺達の小学校時代の話を語ってただけなのだが、中学校から知り合った真琴と晴には興味深い話もあったらしく、熱心に聞いていた。そして、夜中の1時すぎになった。

「
Z
Z
Z
.
.
.
」

俺「おい、真琴寝てるぞ？」

「いたずらしちゃえ」

そういつ未早矢ももう眠そうなのだが。まあ、とりあえずどつちにしろ真琴を起こさなきゃいけないので、真琴の鼻をつまんでみた。

真琴 「 Z Z Z . . . Z プハッ . . .

ハ
ア
・
・
・
Z
Z
Z
・
・
・
L

俺「駄目だ、起きまへん。」

未来矢 「口もふさいでみたら？クスッ」

つまり俺に殺せと？

晴 「しかたないね、真琴も寝ちゃったしそろそろお開きにしようか！」

俺 「そうだな。」

ってなことで、晴が真琴を起こし、寝ぼけながらも女子3人は自分の部屋に戻って行った。さて、男子3人になったさみしい部屋で、豪だけがシーンとしている。

未来矢が豪の鼻をつまんでみた。

豪 「な」にすんだ「お」

・・・起きてた。まあ、2人はほつといておこう。んじゃ

俺 「おやすみー。」

次の日の朝、起きたら7時半。起床時間ぴったりだった。頭がまだボーっとする。昨日寝付いたのが2時過ぎてたせいかな？

未来矢 「うゝん・・・うゝ・・・」

未来矢がうなされてる・・・？どうしたのか見てみると、見事に豪の図太い足の下敷きになっていた。しかも豪の寝相が悪いんじゃないかと未来矢が豪の布団に入ってる！？

5分ぐらいそれをじーっと見ていたら、頭も少しはスッキリしてきた。俺は2人を優しく蹴り起こして、それから昨日の女子3人と合流し、朝食を済ませてからホテルを出た。

今日の予定は修学旅行最終日なので、9時から12時まで自由行動。12時までには、クラスで決めた集合場所に行き、そこからバスとか船で帰還。というものだった。俺達6人は、昨日のうちに土産とかは買っていたので、メチャクチャ大きくて、いかにも都会的なゲームセンターで時間をつぶすことにした。

真琴 「私、あのダンスのゲームやってみる！」

そう言つて真琴が指さしたのは、俺達の住んでいる地区のゲームセンターにはないような、大型のゲームだった。普通初めての人にはこついうのはできないんだが、真琴は反射神経とか運動神経がハンパじゃないうえにダンス部だったから、かなりサマになっていた。

晴 「スッゴー！かつこよすぎ！」

真琴 「へへ・・・そんな事無いって」

イヤ、マジですげーんだけど・・・

そんな感じでいろんなゲームを6人でやっていった。豪がパンチングマシーンを破壊したのはここだけの話だ。

俺は音楽系のゲームが結構得意だったりする。そのゲームセンターはクリアし続ければ、ワンコインでいくらでも遊べるゲームがあったので、それをしていた。あと2曲で記録を更新と言つところで、

未早矢達に話しかけられた

未早矢 「私たち眠くて気分悪いから、先にバス行つて寝とくね。」

まあ、確かに昨日あれだけ夜更かしすれば気分も悪くなるだろ。

俺 「わかった。俺は自分の地図見てバスまで行くから先行つて。」

未早矢 「ふあゝあ・・・んじゃおやすみ・・・記録更新ガンバツテ！」

俺 「あれっ！？みんな行つちゃうの！？」

と俺が言つた時には、未早矢達の姿はなくなつた。もう次の曲が始まつていた。確かにいつもは元気な晴も眠そうだったし、真琴もダンスの後ボーっとしてたな・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺 「よし！記録更新！」

そして、俺はゲームをすぐにやめて・・・外に出てカバンから地図を探した。

・・・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
ない。ない。

そうだった！一昨日豪に貸したままだった！　あ~~~~！！！！終
わった~~~~！！！！

そして、12時が過ぎた。結局バスの時間には間に合わなかった。
というよりゲーセンをでたところから一步も動けなかったと言ったほ
うが正しい。あの5人の中の誰かが迎えに来るとか期待してたから
だ。多分バスの席でおれの周りにいる予定の5人は、バスの中でぐ
っすりで気付かなかった。そしてたぶん幹彦Tは、

「1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・12・13・14・
14・15・17・・・・」

つてなふうに数え間違ひ。授業中にもよくやるしな・・・どんだけ
だよ！よく教師になれたな！？

こんな感じで俺は置いていかれたと仮定する。ハハハハ！
そんなことを考えながら、少しその場を移動して、今ベンチに座っ
ていると言っ訳だった。

5月「ミサンガと記憶」 1・回想 その5（後書き）

次からは、5月「ミサンガと記憶」 2・出会い です。

5月「ミサンガと記憶」 2 出会い（前書き）

2部スタートです。

5月「ミサンガと記憶」 2・出会い

俺 「はあゝ．．．．」

多分、目を覚ましたあいつらが、俺のことに気付いて幹彦Ｔに言ってくれるとおもっただけど。いつになるかわからないなゝ。ってなことを延々と考えながらベンチで俯いていた。

ふと、顔をあげると、そこに、1人の女子が立っていた。そしてベンチに座っている俺のことをじつとみていた。まさか、この女子もおいていかれたのか！？と一瞬考えたが、こんな女子はみたことがない。それにしてもこの子、美人でかわいい。色白で、少しやせ気味で．．．守ってあげたくなるタイプだな。あゝ．．俺の思考ドン引きやわゝ．．．．．

は！いかん。こんなにじつと見てたら変な人だと思われてしまう！

女子 「あゝ？？」

俺 「へ！？お、俺？？何でしょうか？」

女子 「おひとりですか？」

俺 「う、うん。そうだけど．．．」

やべ、こういうタイプの女子と喋るのは初めてだから緊張する。どもりまくりでかつこ悪いなゝ．．俺。まあ、うちのクラスの女子にも晴みたいな美人はいたりするけど、そこは慣れというやつ。

つてか俺、なんで話しかけられたんだろ。容姿は普通ですよ！？

女子 「私、ここ来るの初めてなんで、ご一緒していいですか？」

ああ、そういうわけね。

つて．．．は？ ちよ、マテ。夢か？現実か？こんなのも初めてだ。

俺 「え？どーいう意味でしょうか？俺．．．だよな？」

女子 「あ．．えーと．．．私も1人で寂しいから、一緒にあそんでくれないかなーって．．．」

と、少し顔を赤らめて言った。ダメだ。この顔で俺ノックアウト！俺は知ってる人なんか誰もいるはずはないのに、周りをキョロキョロしてから

俺 「俺でよければ。」

まあ、冷静に考えると、何で俺なのか？とかいうことになるが、この子がかわいいからどうでもいいや！・・・これが男というものです。

女子 「アリガトウゴザイマス！」

と、彼女は満面の笑みで言った。断らなくてよかった。俺は彼女をベンチに座らせて、とりあえず名前やら、どこに行きたいかを聞くことにした。

女子 「私、^{わかば}若葉^{わかば}って言います。これからは・・・と言っても今日1日だと思いますが、名前で呼んでくださいね！」

俺 「若葉・・・さん？俺は叶汰。」

若葉 「あ、呼び捨てでいいですよ？私は叶汰クンって呼びますね。」

俺 「え？ああ・・・じゃあ、わ、若葉。」

ああー！！俺何緊張してるんだ！情けねー！！！！

若葉 「はい。」

俺 「どこに遊びに行きたいの？」

普通は男のおれがエスコートするもんだけど、俺は学校あのメンバーとつるんでるだけあって、他の奴らが行きたい所についていてっただけだから・・・そういうのはワカラン。だから、あえて聞くことにした。

若葉は数秒間考えて・・・

若葉 「ゆ・・・」

俺 「ゆ？」

若葉 「遊園地！」

恥ずかしそうに言った。別に恥ずかしくないんじゃないかな・・・まあ、いいや。俺はできるだけさわやかな笑顔を作って

俺 「わかった。地図があるからこれの中から選ばう?。」

俺はポケットから地図を出した。

・・・

は?地図?あ~~~~~!!!!!!そうだった。豪に貸したあと、なかなか還ってこないから、未来矢に借りたんだった。なんてこっ
たい!

若葉 「どうかしました?」

俺 「いや、ハハハ・実はね。」

俺は今までの経緯を若葉に話した。

若葉 「そんな話、聞いたことありません・・・。すごく大変でしたね。でも、私は嬉しいです。そのおかげで、こっやって叶汰ク
ンと遊べるんだから。」

ああ・・・嬉しすぎる。これが夢だとしても、その日の朝の目覚め
は最高だろう。実際現実なんだが。

5月「ミサンガと記憶」 2・出会い その2

そんなこんなで、俺達は京都にある中くらいの大きさの一般的な（観覧者とかメリーゴーランドとかコーヒーカップとか・・・がある）遊園地に行くことに決めた。決めるうえで色々と話すうちに、若葉の敬語は無くなった。これは、警戒心が解けたってことなのかな？そして、着いた。案外大きかったので若葉は少し驚いていた。俺は、修学旅行のお小遣いがまだかなりあまっていたので、男としての尊厳を保つために？おごることにした。

俺 「俺がおごるよ。」

若葉 「えっ！そんなの悪いよ。」

俺 「俺も男だ。おごらせてくれ。」

若葉 「アハハ 訳わからないけど、じゃあお願いしますっ！」

ほ・・・訳わからないと言われたような気がしたけど、おごれてよかった！

入場したのはいいが、かなりたくさんアトラクションがあるみたいだな。

俺 「まず何にのる？」

若葉 「ジェットコースター？」

俺 「う・・・」

若葉 「まさか、苦手なの？」

俺 「いやいや！大丈夫に決まってんじゃん！・・・多分。」

実は、小学5年の時に乗ったのが最後なんだよね。しかもメッチャ怖かったし。そして乗る。

・・・

俺 「案外楽しいじゃん？」

若葉 「うんっ！」

若葉はこういうのは得意らしい。

そういえば、さつきからすれ違う若者がたまに振り返る。理由は大體分かる。若葉は一般的にカワイイ。そして、そんな子が男の俺と一緒に歩いてるから、デートと間違えられてる。ん、妬まれてる？

そして、その後2アトラクションぐらいまわったところで、若葉が『いいもの』を見つける。

若葉 「これ、行こう？」

遊園地のお約束『お化け屋敷』。

俺 「もちろんOK」

俺はこんな作りものなんかを怖がるほどの男じゃありませんから。でも、若葉はちよつと怖そうだ。

入場口は、いかにもって感じの作りだ。中に入ってみると、ギリギリ先が見えるぐらいの暗さだった。

俺 「足元気をつけるよ。」

若葉 「うん……ひ……」

俺 「どうした？」

若葉 「足にプヨッ……って。」

俺は手探りして拾ってみた。

俺 「プッ！ただのコンニャクだよ」

若葉 「な……んだ！もお、笑わないでよ！」

表情はあんまり見えないけど、多分笑ってる。

その後も、ボロチヨウチンやら、コンニャクの襲来が多数あったが、若葉がたまに悲鳴を上げるだけで、俺は全然驚きもしなかった。

俺 「これじゃお化け屋敷じゃなくて『おバカ屋敷』だな」

若葉 「そんなこと言っているとバチがあたるよ。」

そして、入場してから3分ぐらいたったところ

……ドンッ！

俺 「いてっ」

何かにぶつかって……顔を見るとその顔は……ライトで照らされて……

俺 「をooooo！」

若葉 「きゃあああ！」

.....

その後はダッシュで逃げたからあんまり覚えてない。俺が悲鳴を上げた理由？それは、そのお化け（ゾンビ）の顔が、豪の寝顔にそっくりだったからさ。

若葉 「あゝれれれれ？？エヘヘ 叶汰くん？ビビってるじゃん？」

俺 「いや、親友に再会してしまつて。」

若葉 「はい？」

俺 「気にしないでくれ・・・」

そのあと、若葉からなんとか頬をツンツンされながら笑われた。いや、あれはシャレにならないって。ウチの学校の女子なら気絶してるぞ。なんか血い噴き出してたし。

その後も、いくつかアトラクションをまわった。閉園時間も近くなり、俺達が最後に選んだリアクションが観覧者だ。あたりは夕暮れの光でほのかに赤くなっていた。

乗り込むと、俺達は向い合わせで座った。

5月「ミサンガと記憶」 2・出会い その3（前書き）

2部終了です。

物語の起の部分終了？

5月「ミサンガと記憶」 2・出会い その3

俺は改めて若葉の顔を見た。白い肌が夕焼けの赤に染まっでいて、なんというか・・・芸術的だった。やっぱり若葉には、まわりの女子とは違った魅力がある。多分。半分ぐらいの高さになったところで若葉が口を開いた。少し悲しそうな顔で。

若葉 「今日、すごく楽しかった。」

俺 「俺もだよ。」

若葉 「もう、帰らなきゃね。」

俺 「・・・うん」

そうだった。時間的にもう俺は、駅のところまで行っておかないといけない。あまりクラスの皆を心配させすぎるのは良くない。多分T（先生）やらが学校側で決めた集合場所で待ってるはずだ。本当に今現在の出来事が、夢のように感じた。

若葉 「実は・・・私ね。」

また若葉が口を開き始めた。

若葉 「なんでここにいたかが良くわからないの。」

俺 「は？」

若葉 「気づいたら、叶汰クンの前にいたんだよ？」

俺 「・・・」

俺は本当か冗談か問いただそうとした。しかし、その前に若葉が

若葉 「なんてねっ 冗談だよ！」

と言った。それは丁度、観覧車のでっぺんに来た時だった。眩しくて良く見えなかったけど、若葉は涙目だったような気がする。理由は、わからない。俺の気のせいかもしれないし。

そして、若葉は俺の隣に移動してきた。少し観覧車が斜めになって驚いたけど、心臓の鼓動が大きくなってるのはそのせいじゃなかった。ほのかにいい香りが漂ってくる。理由はわからないけど、懐かしいような気がする。なんだか暖かくて眠ってしまいそうだ。

・・・・・・・・

それから観覧車の乗り降り口につくまで俺達は2人とも無言だった。それは、遊園地を出ても同じだった。

わからない。この気持ちがなんなのかはわからない。会話のネタ切れって訳でもないし、ただ、なんか喋っちゃいけないような・・・

若葉 「着いちゃったね」

俺 「・・・・うん。」

夕日がもうすぐ沈もうとしていた。さっきよりもっと眩しかった。ここは大通りから外れた人通りが少ないところだった。

若葉 「今日は、本当にありがと！」

俺 「俺のほうこそ」

若葉 「バイバイ！叶汰。」

俺 「うん。じゃあね」

俺は、自分のできる精一杯の笑顔で見送った。そして、若葉は俺に背を向けて駆けだした。

俺 「あ・・・」

俺は手を伸ばして、若葉にもう一声かけようとした。しかし、若葉は俺の視界から消えて、街の大通りの雑踏の中に消えていた。俺は、また、会えるかな？なんて聞こうとしてた。

なんでだろう。1日だけだったのに。そりゃあ外見の魅力と言うのもあるけど、違う。そうじゃない・・・やっぱりわからなかった。ただ、寂しいだけだった。

俺が集合場所のベンチに腰かけて10分ぐらいしたところ、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「きよーーーーーたーーーーー！！」

真琴の声だ。すごいスピードでこっちに走ってくる。さっきまで考えていたことやら寂しさがふっとんだ気がした。

真琴 「ハア・・・ハア・・・よ・・・良かったあ！心配したんだよ！」

どうやら俺の無事を心から喜んでくれているらしい。

それに続くように、みんなが来た。あの5人と、幹彦Tだ。教師はもちろんのこと、仲のいい友達まで一緒に連れてきてくれるところが幹彦Tらしいな。・・・ん？4人だ。豪がいない。

幹彦T 「佐野！すまんかった！しかし、おまえも悪い。」

俺 「ごもつともで。」

俺達はバス停前歩いて行くことにした。

未早矢 「・・・それでねー！真琴がヤバかったんだよー！涙目になつてたし。」

未早矢が意地悪っぽく笑いながら言った。

真琴 「だって、本当にビックリしたんだよっ！」

未来矢 「そう言う未早矢こそ、警察とか消防車とか訳のわからないこと叫んでたけどね」

未早矢 「う・・・」

俺 「そーいや、豪は？」

未来矢 「寝てたから置いてきた。」

ニコニコしながら未来矢が言った。

真琴 「寝言でお化け屋敷が・・・とか言つてたよ。ハハハ」

俺 「ブッハハハ！マジかよ！？おまえらひでー！」

（ん？お化け屋敷？まさかな・・・）

その後も、みんなで爆笑しながらバス停まで歩いた。俺はこの時だけ、若葉とさよならした時の訳のわからない寂しさを忘れていた。

うん。やっぱりこのメンバーは最高だ。豪いないけど。

でも、その日の夜に、また若葉と遊んだ時のことや、観覧車の中で
のぬくもりを思い出しては、寂しくなつてしまった。

・・・

5月「ミサンガと記憶」 3・夢の中で

キーンコーンカーンコーン
・・・

この土日は、あの子のことばっかり考えてた。もちろん若葉のことだ。そんな感じでただるいけど、今日からまた学校だ。ここは俺達の学校。時下中学校だ。中学校とか言われてるけど、隣に高校があるって、希望者はエスカレーター方式で行ける。高校付属といった感じの所かも・・・よくわからない。

そして、この学校の隣には、非常に大きい時計台がある。遠くからでもうちの学校だっすぐ分かるぐらいの大きさだ。ちなみにこの時計台がチャイムを鳴らしている。時計台に見下ろされてるから時下学校だ。校長曰く。

いつもどおり授業が始まった。しかし、どうもいかん。あの修学旅行で起こった不思議な出来事？を思い出すとどうしてもボーっとしてしまう。

俺 「ハア・・・」

キーンコーンカーンコーン

授業の内容があまりわからないまま1時間目が終わった。

豪 「何ボーっとしたりニヤニヤしたりしてんだよ？」

俺 「ん？・・・いや、ちょっとね。」

後ろの席の豪に心配された。俺ってば重症？

そして、2時間目に入った。やっぱり頭の中はあのことを考えていた。

どう考えてもおかしいような気がする。本当に初対面なのかすら疑わしい・・・まさか、前に会ったことが？いや、記憶にないし。そんなことを考えていた矢先のことだった。

??? 「くおら!!! 佐野オ! なんばヨソ見しおつとかおめえはつ!」

ハッ!

前を向くと目の前にチヨークが飛んできていた。

ポコーン

俺 「いでえつ!」

快音と同時に俺のデコに痛みが走った。

クラスメイト 「クスクス・・・」

恥ずかしっ! 数学の時間だったのを忘れてた。鬼教師 「津田 宏^{つだ ひろし}」の授業だった。この教師、生徒が喋っていたりヨソ見をしたりしている、すぐにチヨークを投げる。しかも百発百中だったりする。去年の先輩達の話によるといくつか技を持っているらしい。

一・「ニューチヨーク」 新品の使っていないチヨークを投げる。

もろさがないので痛さが倍。

二・「カッティングダブルチヨーク」 多人数でおしゃべりをしている生徒に向けて投げる。机の角などにあてて、割ったチヨークが全員のもとへ飛んでいく。三角関数やらなんだかんだで計算しているらしい。

三・「奥義・バーニングチヨーク」 チヨークが火をふく。そして爆発する。

四・「奥義・津田スペシャル」 説教。

ほんまかいな・・・

とか考えているうちに

津田T 「コリャ! ボーつとするな言うところうがっ!!」

またチヨークを投げてきた。

しかしっ! 同じ技に1日に2度も引つかかる俺ではない。サッとよけてやった。

生徒たち 「オー」

生徒たちから歓声が起こった。次の瞬間

スカーン

またもや快音と同時に後頭部に痛みが走った。後ろの席の豪の筆箱にあてて、俺の頭に当たったみたいだ。カッティングダブルチョークだった。痛い。あれ？そういえばもう1個の割れたチョークはどこに？・・・

居眠りをしていた豪の鼻の穴に刺さっていた。

豪 「zzzzzzzz・・・フゴッ・・・zzzzzz」

おお、まだ寝てる。

クラスメイト 「プッ！クスクス・・・」

津田「次はコンパス投げるかいなー！」

！？

そんなこんなで、午前中は終わった。

5月「ミサンガと記憶」 3・夢の中で その2

やつと昼食だ。いつもどおり6人で食べる。

晴 「今日も真琴の弁当は美味しそうだね」

真琴 「へへ サンキュ」

真琴の家族は、父親と弟だけだから、昼ごはんは真琴と弟で交互で作っている。だから真琴は料理がうまい。今日の弁当もタコさんウインナーやら卵焼きやらいろいろ入ってて旨そうだ。

俺 「真琴が作ったんだろ？」

真琴 「そうだよー！」

やっぱり。弟はウインナーをタコさんにしないもんな。

豪 「そのベーコン巻き食っていいか??」

と言いつつもう手に取っている豪。

真琴 「いいよ……って……あつ……」

一同 「あ」

豪 「ムグムグ……どうひた？」

一同 「……」

今、ベーコン巻きに、緑色の仕切りがついてたような。あの海苔みたいなやつ。

豪 「ゴクン。ん、なんか今日のは歯ごたえがあつたな。」

やっぱり!?

未来矢 「食べちゃったよ……」

未早矢 「この間はツマヨウジまで食べてたけどね。」

未早矢がボソツと呟いた。うーん、危ないやつ。しかし、こいつらと楽しく喋っていると俺の悩みも吹っ飛びそうだな。

そして、昼休みも終わって午後の授業に入った。

今日の午後の最初の授業は体育だった。男子は野球。女子は体育館

でバレー。面倒くさいけど、エスケープするわけにもいかないの、俺は滅多にボールが来ない外野で守っていた。そこでまた、若葉のことを考えていた。考えるというより、何なのかがわからないでボーっとしてる感じ。そして1回オモテ。いきなり内野陣のエラーでノーアウト満塁らしい。なんか打席から豪の声が聞こえるな・・・どうでもいいか。俺はまたボーっとしていた。

ガキーン！

豪 「叶汰！あぶねえ〜！」

俺 「ん？」

顔をあげると、目の前に何かがあった。丸いな、回転してるな、縫い目があるな・・・

！！！！

ゴッ！という鈍い音とともに、俺の意識は遠のいていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

どこだっけ？ここ？・・・

ああ、この感じは夢かな？心地いいって言うか暖かいって言うか。

しかし、妙にリアルな夢だ、耳もしっかり聞こえるし、目もしっかり見える。まるで、本当にそこにいるみたいだ。

ここは・・・病室かな？見たところ、人の気配はあまりない。視点を横に移すとその病室のベッドに1人の女の子が座って外を見ていた。

俺 「あ・・・ああ・・・うそだろ。」

俺 「若葉ッ！」

しかし、やっぱり夢らしく、俺の声は聞こえてないみたいだ。

なんでだ？あの日、あそこにいた若葉が何で病室にいる？それより、なんなんだこの夢は？

俺が夢の中でパニックになりかけた時、一人の小さい男の子が病室に入ってきた。

5月「ミサンガと記憶」 3 夢の中で その3

男の子 「おねえちゃん、僕とあそんでよ」

若葉 「・・・え？」

若葉は不思議な表情をしていた。

若葉 「ごめんね。お姉ちゃん、あんまり目が見えないから遊んであげられないよ。」

ふと、男の子がこつちをむいて顔が見えた。どこかで見たような顔だ・・・

男の子 「いいよー。お話とか聞かせてよー」

若葉 「え？そんなのじゃつまらない？」

男の子 「つまらなくはないよ！たくさん聞かせて？」

若葉 「わかったよ。君の名前は？」

男の子 「名前？・・・わからない。」

わからない？本当にこの夢はなんなんだ？妙にリアルだ。そこに見えているのは確かにあの時一緒に過ごした若葉だ。

若葉 「クスッ・・・面白い子」

男の子 「はやくー」

若葉 「うん。じゃあまずは私の小さい時の話をしな。ちょっと、君ぐらいの年の頃の話だよ？」

・・・ピッ・・・ビシッ。

あ・・・景色が・・・歪んで・・・

音も何も聞こえなく・・・

・・・
・・・
・・・

??? 「叶汰あああッ！」

誰だ？何でそんな大声でおれの名前を？

目をあげると、そこには・・・

俺 「っ！」

男泣きをされている豪さんがおりました。

豪 「良かったっ！俺のボールが当たって死んだかと思った！ごめんよー！ウウウ・・・」

俺 「いや、別にいいけどさ・・・人の顔の上で泣かないでくれ・・・」

ああ、もう・・・

結局その日は、保健室の先生に言われて自宅に帰ることになった。

俺は、自室のベットの上でゴロゴロしながら、今日の夢をもう一度思い出してみた。あの夢が、現実を起こっていることだとしたら？・・・いったい若葉は？あの男の子は？

考えるだけで頭が痛かったので、今日はもう寝ることにした。

次の日 。

いつものように登校して、教室に入ったとたん真琴が話しかけてきた。

真琴 「叶汰！おはよっ！大丈夫だった？」

俺 「うん、まあ、一応」

真琴 「なんか・・・元気くない？」

俺 「えっ？そ、そんなことないって・・・」

流石は真琴・・・するどい。でも、真琴ならなんかわかってくれそ

うな気がする。

俺「・・・実は・・・信じられないかもしれないけど」
キンコーンカーンコーン

俺が話そうと思った瞬間にチャイムが鳴った。

俺「わりい。2時間目の長い休み時間に！」

真琴「う、うん。わかった！屋上でいいかな？」

そして、長い長い国語の時間が終わり・・・

俺は屋上に到着した。ちなみに、ここは、俺と真琴・・・いや、俺達と真琴がはじめて会話を交わした場所だった。

真琴「で、なんなの？話そうとしてたことって・・・」

俺「うん。実は」

俺は修学旅行から今までのことを事細かに話した。真琴はしばらく考え込むような顔をして

真琴「ありえない話じゃ・・・無い・・・よね？」

俺「何が？」

真琴「その・・・叶汰の夢が現実だったってこと。私たちの修学旅行が終わって土日間に怪我して入院したってことも考えられるしさ」

俺「確かに。でも。」

目が見えないと言ってたような気がする。俺は言おうと思ったがこれ以上真琴に考えさせるのも悪いと思って言葉を飲み込んだ。

真琴「でも？」

俺「いや、そんなことが本当にあるのかな？と思ってさ。夢で現実世界のことを見るなんて」

真琴「あるさっ 不思議なことってのは僕たちの年代にはつきものだよ！」

ニコニコしながら言われたからか、妙に納得してしまった。

俺「だな！がんばって手掛かりとか探してみるよっ！」

真琴「うん。頑張つて・・・その・・・いつでも相談してね。力になれることがあればできる限りでやるから。」

俺 「ああ。ありがとう」

そんな感じで、真琴への相談は終了した。そして、今の相談をきっかけにして、俺は夢の手がかりを探してみることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5226d/>

モラトリウム ～未熟な感情の中学生達～

2011年1月18日15時42分発行